

佐原 眞著

『日本人の誕生』

大系日本の歴史 1

本書は大系日本の歴史（全一五巻）の第一巻として刊行された、一般読者を主に対象とした日本先史時代の通史である。今日、膨大な発掘調査にともなう考古学的情報は加速度的に増加しており、研究者がひとりこれらを体系的に把握することはますます困難になりつつある。また、当然の事ながら研究者はある地域なり時代なりをさらに細かく深く追究するという専門分化してゆく傾向が強い。こうした状況下で、考古学研究者がひとり日本先史時代を叙述することは大変困難なまた勇氣のいる作業であろう。著者は新たに掘り起こされた最新の考古学的事実、特に関連諸科学との共同研究による今までは期待し得なかつたような成果を豊富に取り入れ、著者が近年進めている世界の先史文化や民族例との比較をとおして、魅力あふれる個性的な叙述をつ

くり上げた。著者自らが「まったく新しい」と評する日本先史時代史が本書である。

最初に本書の構成を掲げておこう。章別構成をとっていないので、章にあたる部分を記し、叙述の便宜上、番号を付しておく。

- I いつから日本人か―はじめに―
 - II 岩宿時代の日本
 - III 石の刃の威力
 - IV 土器と弓矢とイヌと
 - V 山の幸
 - VI 海の幸
 - VII 縄紋人と現代人
 - VIII 住まいと環境
 - IX 冠婚葬祭
 - X 米の文化
 - XI 鉄と青銅の世紀
 - XII 邪馬台国前後
- 構成を一瞥してわかるように、この種の通史にありがちな先土器、縄文、弥生といった時代名を冠する章別構成をとらず、先史文化の様々な様相をトピック的に取り上げ、つなぎ合わせるという形式をとっている。内容的にはIは序章にあたり、II～IIIは先土器文化、IV～IXは縄文文化、X～XIIは弥生文化に関する記述となっており、I

を除いてそれぞれの章には二～五の節に相当する項目がたてられている。土器を使用した狩猟採集民の文化である縄文文化に比重がおかれた叙述となっている。

内容は多岐にわたる、拙ない要約ではかえって本文の味を損ねる結果になろう。細かな内容については直接本書にあたっただくとして、ここでは、本書の特色と考えられる点を記し、その後、一、二気付いた点を指摘して紹介にかえたいと思う。

本書の特色の第一は最近、判明したばかりの最新の成果、特に関連諸科学による成果を積極的に取り入れ、叙述に生かしている点であろう。石器や土器、あるいは土中に残る脂肪酸の分析による狩猟対象や煮炊きの内容等の復元、灰療法による植物種子の研究、ブランドオパール法による稲の研究等、ここ数年で飛躍的に解明されつつある事柄であり、こうした関連諸科学との共同研究による成果を抜きにしては先史文化を復元することははや不可能になりつつあることを示しているといえよう。

第二は世界の先史文化例や民族誌的事例を豊富に取り入れ、比較文化的方法をとっている点にある。考古資料はそれ自体、雄弁

にものを語るといふことは少なく、概説書が考古遺物や遺跡自体の説明に終始するということがまま見受けられる。著者は世界の先史文化例や民族事例をふんだんに取入れることよって、具体的様相を復元し、また、文化比較から日本先史文化ひいてはそれにつながる日本文化の世界史の中における特色を浮かび上がらせている。先史時代人の生活を重視し、社会の様々な様相を復元する方向は歴史学におけるいわゆる社会史の盛行と通じ合うものがあろう。

第三は図や比喻を駆使した、簡易平明な叙述のスタイルである。研究者がふだん用いる専門用語は一般人には馴染みにくく、本書のような一般向けの書物の場合、いかに分かりやすく成果を伝えるのかということが重要な課題になる。著者は、「日本考古学では、穴のことを『土坑』(土坑)とよんでいる」というように難解な用語には説明を付け、また、結果のみでなく、新たな成果が判明し、それが提起されてゆく研究過程を伝えることで臨場感あふれる叙述に仕上げており、随所にちりばめられたユニークな比喻とあいまって、一般読者が興味深く学べるように工夫されている。

本書は「考古学をやさしくしよう」という提言をなし、考古学の成果を分かりやすく社会に還元することに腐心する著者の見事な実践の書であるということもできよう。次に、一、二気付いた点について記しておきたい。本書は一般向けの書物であるが今後検討されるべき独自の見解がいくつか述べられている。ひとつに時代区分に関する問題があり、日本における土器使用以前の文化・時代を何と呼ぶかという点について新たな見解を述べている。現在、考古学では土器使用以前の文化・時代について先

土器文化(時代)ないしは旧石器文化(時代の)の呼称が広く使われている。著者は、「先土器(プレヒセラミック)時代」という表現は、土器出現に先立つ時代という意味であって、その直前の時代を指し、中略「長大なこの時代を表現するのにふさわしくない」とし、また、「旧石器時代」という表現は、当然、新石器時代に対する表現である。しかし、あとでとりあげるように、日本には新石器時代は存在しなかったと考えるべきであり、旧石器時代の細別法も大陸の旧石器時代とは異なることを指摘して、八幡一郎、角田文衛両氏がかつて提起した

ことがある「岩宿時代」と呼ぶことを提唱している。これは単に時代の名称という問題にとどまらず、著者が指摘するように、日本に新石器時代は存在しなかったといえるのかという点や時代名と文化名との本来的あり方等も含めて、今後大いに議論を要する提起となるであろう。

最後に、やや気になった点を記しておきたい。著者は、縄文晩期亀ヶ岡文化における奴隸の存在を民族例から類推している。亀ヶ岡文化の奴隸の存否は今後実証されるべき大きな問題であるし、奴隸の存在は奴隸制社会ではない。記述は一般の人に亀ヶ岡文化が奴隸制社会であるような誤解を生み出す危険性をもっているように思う。ともあれ、本書は最新の考古学の成果や世界の枠組みの中で日本先史文化の特色が活写されており、本書の刊行が考古学に対する一般の人々の関心をますます高める役割を果たすものと確信する。それだけに、考古学の社会的役割に対する自覚がさらに要請されてくるであろう。

(A5版 三五〇頁 一九八七年一月
小学館 一八〇〇円)

(千葉 豊 京都大学助手)